

## 東南アジアの基層文化:精霊信仰

### 1. ねらい

東南アジアの文化一般の基層にある精霊に対する信仰を取り上げ、その基本的な側面を検討する。東南アジアの多くの地域では遅くとも5世紀にはインド文明の影響を受けてインド的宗教観念が導入され、さらに大陸部では13世紀以降に上座仏教の影響を受けたり、島嶼部で15世紀以降にイスラームの影響を受けたりして、精霊信仰の実態が見えにくくなっている面がある。したがって、それ「以前」の状況を知るためには、インド文明（およびそれ以後のイスラームやキリスト教）の影響を（比較的）受けなかった周辺部の社会の観察や、現在も保持されている土着的な習俗儀礼の観察から手がかりを得る必要がある。

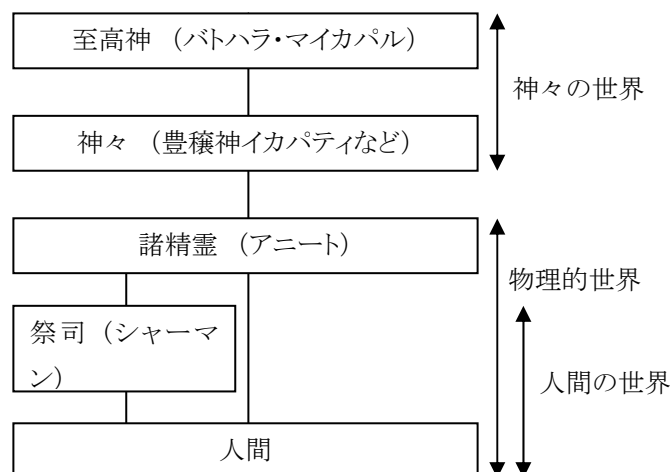
### 2. 精霊

- 精霊 (spirit) 「物質的身体をもたず、何らかの人格性を有する超自然的存在のうちで、超人間的能力をもって人間生活に善悪それぞれの影響を与えると信じられるもの」(『文化人類学事典』)。
- 人間の住む現実世界の限られた領域(山、森、湖、海;樹木、水、寺院など)で活動。←→神話(世界創世などで活躍する神。柳田国男『遠野物語』(1910)。カミ(god)、妖怪(モノノケ←→カミノケ)
- 魂、霊魂(soul):生体(人間など)の中に存在し、死後も存続する。
- 霊魂から精霊への転換可能。神との階層的な連続性。例:ニヤイ・ロロ・キドゥル、天神(菅原道真)。
- アニミズム(animism)「霊的存在への信念」。タイラー(E.B.Tyler, 1832-1917)の用語。「原始宗教」の特色であり、霊魂、死霊、精霊、悪鬼、神性、神々を含む。

### 3. 周辺地域の精霊信仰の事例

#### 1) フィリピンの事例

- モルガ『フィリピン諸島誌』(1609)「彼ら[住民]は悪魔を恐れ、悪魔に恐れおののいていた。そして、彼らは多くの場合悪魔を崇拝し、前に述べたような形に悪魔[の像]を作って、それを洞窟や自分の家に置き、香や食物や果物などを供えていた。それらはアニトと呼ばれている。」(『フィリピン諸島史』p.353)
- 先スペイン期のフィリピン住民の宗教的パンテオンの構造をまとめると以下になる(『もっと知りたいフィリピン』p.104に補筆)。このような構造はキリスト教にもイスラームにも帰依しなかった少数民族(ボントック、ハヌオ・マンヤン、ネグリートなど)によって現在も保持されている。



- バトハラ<Skt. bhattāra (lord)。パティ<Skt. pati (lord)。アニト<Malay. hantu。
- 

#### 2) カリマンタン、イバン人の事例

- イバン人。西カリマンタン州。約2万人。山地少数民族。焼き畑農業。サラワク州に約40万人。

- アントウ(antu. cf. hantu):精霊、神々の総称:不可視の超越世界の住民←→現象世界。
- 尋常の理解を超える不可思議なものはすべてアントウ。人間のように人間でない存在もアントウ(神、精霊、妖怪、死霊)。なかでも、人間に好意的な存在はプタラ(プタラ)とよばれ、個別の名を持つ。
- イバン人はアントウ(プタラ)に祈願し、供物を捧げて、招福を得る儀礼(gawai. cf. pegawai)をおこなう。
- 戦の神シンガラ・ブロンは(Singalang Bulong)もっとも有力なプタラ。ワシ・トビの姿で出現。この神の娘婿である7種の鳥による占い。シンガラ・ブロンを招来する儀礼(ガワイ・クニャラン、ガワイ・ブロン)はイバン最大の祭り。首狩りの成功を祝う。
- マナン(シャーマン):災い(病気など)をもたらすアントウとの交渉をおこなう。個人の靈魂(semangat)が身体を脱して超越世界に参入する。脱魂型シャーマン。比較:インドネシア語semangat.

#### 4. シャーマニズム

アニミズム的世界観をもつ社会においては、精霊との交流をもって招福攘災をおこなう能力をもった専門家がしばしば存在。霊媒師(媒=medium)。シャーマン(ツングース系諸語で「呪術師」)。

- シャーマン(shaman, shamanism)「神や精霊からその力能をえ、神や精霊との直接交流によって託宣、予言、治癒、祭儀などを行う呪術-宗教的職能者」(『文化人類学事典』)。
- 脱魂型(ecstasy):シャーマンの魂が身体を脱して異界に入り、神や霊と交流する。
- 憑依型(possession):霊がシャーマンの身体に取り付く。例:ジャワ、バリ。
- トランス(trance):意識の変容による正常にあらざる精神状態。忘我、法悦。

#### 5. ジャワ・バリにおける事例(イスラーム、ヒンドゥー地域)

ジャワやバリにおいては精霊信仰は、社会の支配的な宗教的世界観としては、イスラームあるいはバリ・ヒンドゥーというより高位の卓越した宗教体系にとって替わられており、芸能・儀礼あるいは宗教とは切り離された「術」のひとつとみなされるようになっている。

- ドクン(dhukun):ジャワの呪術師。まじないによる悪霊退散(医療行為)。まじないによる異性の誘惑。「悪霊」を飼うことによる蓄財。敬虔なイスラーム信徒は否定的に見る。参考:ジン
- ジャティラン(jathilan):ジャワの民衆芸能。踊りの中でトランス状態に陥る。馬の霊の憑依。
- スラマタン/クンドウリ(slametan/kendhuri):ジャワ(などの)共食儀礼。
- サンギャン(sangiang<sang hyang):バリの儀礼的伝統舞踊。踊り手に神、霊、動物などが憑依する。サンギャン・ジャラン(馬)、サンギャン・ドゥダリ(天女)などがある。
- 「共同体が悪魔や悪霊によって引き起こされた危険に脅かされた時、神々と人間との間の保護、被保護の関係を確立する手段として、呪的に穢された共同体の穢れを祓い、善と悪の呪的なバランスを回復させるためにサンギャンは踊られる。」(『神々の島バリ』p.98)

#### 6. タイ東北部・ラオスにおける事例(上座仏教地域)

- タイ東北部(イサーン)・北部やラオスのラオ人の間ではバーシー・スークワンと呼ばれる儀礼がある。
- 共同体の構成員の安寧(健康、安全、治癒)を祈願する。
- 個人の32のクワン(魂)を身体に集中安定させたあと(スークワン)、儀礼参加者が互いの手首にひもを巻き付ける(バーシー)。

#### 7. ビルマ(ミャンマー)における事例(上座仏教地域)

- 37のナツ。ヒンドゥーの神、仏教の守護神を含む。
- パガン朝アノーヤター王(1044-1077年)。タジャーミン(インドラ神)を最高位に置く。ナツ信仰の国家統制。
- 聖地:ポウパー山(パガン)、ダウンビョン(マンダレー)。
- 伝説:ビャツウィ、ビャッター兄弟の漂着→王のタトン遠征に参加→ポウパー山の花摘み→二人の兄弟誕生

→王の中国遠征に参加→タウンビョンのパゴダ建設→非業の死。

- シャーマン:ナッカドー(「ナツの妻」の意)。一般に女性。

## 8. 精霊信仰が意味すること

前近代、とくに体系的宗教が伝来する以前は、精霊信仰は社会によって共有される世界観であった。これが基層文化としての精霊信仰である。精霊はタイ語・ラオス語ではピー、ビルマ語ではナツ、島嶼部の言語では一般に現代インドネシア語のhantuの同語源語で表現される。それは以下のような特徴をもつ。

- 精霊は人間や動物や植物と同じレベルの生きた存在である。精霊にはさまざまな種類があり、その中には生息する領域が、人間の住む現実世界と重なっているものも少なくない。通常、精霊は不可視であるが、状況によっては人間に憑依したり、可視的な状態に変身したりすることによって人間と交流をもつことがある。
- 人間の中には精霊と意図的に交流することが可能なものがある。そのような人間を通じて精霊と交流し、儀礼と供物の提供することによって、精霊の力によって招福攘災をおこなうことができる。
- 精霊と人間の交流の仕組みは、ヒンドゥー教や大乘仏教、上座仏教、イスラームが到来して後も、維持された。

## 1. 参考講義

2学期火曜日1限(101教室)リレー講義「世界に現れる《神》」の中の青山「インドネシアの神・神々・カミ」

## 2. 参考図書

- 綾部恒雄, 石井米雄編『もっと知りたいインドネシア』弘文堂, 1995. とくに「宗教と世界観」の章.
- 綾部恒雄, 石井米雄編『もっと知りたいフィリピン』弘文堂, 1995. とくに「宗教と世界観」の章.
- 綾部恒雄, 石井米雄編『もっと知りたいミャンマー』弘文堂, 1994. とくに「宗教と世界観」の章.
- 綾部恒雄, 石井米雄編『もっと知りたいタイ』弘文堂, 1995. とくに「宗教と世界観」の章.
- 石川栄吉他編『文化人類学事典』弘文堂, 1987.
- 内堀基光, 山下晋司『死の人類学』(講談社学術文庫)講談社, 2006. 弘文堂(1986)の文庫化.
- M=エリアーデ『シャーマニズム』堀一郎訳(ちくま学芸文庫)2巻, 筑摩書房, 2004.
- 大野晋『日本人の神』(新潮文庫)新潮社, 2001.
- ケンチャラニングラット編『インドネシアの諸民族と文化』加藤剛他訳, めこん, 1980. とくに第15章.
- Schäler, Hans『ガジュ・ダヤク族の神観念』クネヒト・ペトロ、寒川恒夫訳, 弘文堂, 1979.
- 合田濤『首狩りと言霊—フィリピン・ボントック族の社会構造と世界観』弘文堂, 1989.
- 佐々木宏『シャーマニズムの世界』(講談社学術文庫)講談社, 1992.
- 清水展『出来事の民族誌—フィリピン・ネグリート社会の変化と持続』九州大学出版会, 1990.
- Tambiah, Stanley. *Buddhism and the Spirit Cults in North-East Thailand*. Cambridge University Press. 1970.
- マルバングン・ハルジョウィロゴ『ジャワ人の思考様式』染谷臣道, 宮崎恒二訳, めこん, 1992.
- 宮崎恒二他編『暮らしがわかるアジア読本 インドネシア』河出書房新社, 1993.
- 宮本勝『ハヌノオ・マンヤン族—フィリピン山地民の社会・宗教・法』第一書房, 1986.
- モルガ『フィリピン諸島史』(大航海叢書7)岩波書店, 1966.
- 吉田禎吾監修『神々の島バリ』春秋社, 1994. とくに第5章「儀礼としてのサンギャン」

## 参考資料

『古事記』中つ巻 崇神天皇 【出典：倉野憲司校注『古事記』（岩波文庫）2007, pp. 112-113.】

## ◆ 王(天皇)、祭司(神主)、神(大物主大神)、民衆の四者の関係はどう描かれているか？

この天皇<sup>みよ</sup>の御世に、疫病<sup>えやみさは</sup>多に起こりて、人民死<sup>たみ</sup>にて尽きむとしき。

ここに天皇<sup>うれなげ</sup>愁ひ歎きたまひて神牀<sup>かむどこ</sup>に坐しし夜、大物主大神<sup>おほものぬしの</sup>、御夢<sup>みいめ</sup>に顕<sup>あら</sup>はれて曰りたまひしく、  
「こは我が御心ぞ。故、意富多多泥古<sup>おほたねこ</sup>をもちて、我が御前<sup>みまへ</sup>を祭らしめたまはば、神<sup>け</sup>の氣起こらず、  
国安らかに平らぎなむ。」とのりたまひき。

ここをもちて駅使<sup>はゆまつかひ</sup>を四方に班<sup>よも</sup>ちて、意富多多泥古<sup>おほたねこ</sup>と謂ふ人を求めたまひし時、河内の美努村<sup>かふちみののむら</sup>にその人を見得<sup>みえ</sup>て貢進<sup>たてまつ</sup>りき。

ここに天皇<sup>な</sup>、「汝<sup>た</sup>は誰が子ぞ。」と問ひたまへば、答へて曰ししく、「僕は<sup>あ</sup>大物主大神<sup>おほものぬしの</sup>、陶津耳命<sup>すうつみみのみこと</sup>の女<sup>いくたまよりびめ</sup>、活玉依毘賣<sup>しゅ</sup>を娶<sup>く</sup>して生める子、名は櫛御方命<sup>くしみかたのみこと</sup>の子、飯肩巢見命<sup>いひかたすみのみこと</sup>の子、建甕槌命<sup>たけみかづちのみこと</sup>の子、僕<sup>あれ</sup>意富多多泥古<sup>おほたねこ</sup>ぞ。」白しき。

ここに天皇<sup>いた</sup>大く歛<sup>よろこ</sup>びて詔りたまひしく、「天の下平らぎ、人民<sup>たみ</sup>栄えなむ。」とのりたまひて、  
すなはち意富多多泥古命<sup>おほたねこのみこと</sup>をもちて神主<sup>かむぬし</sup>として、御諸山<sup>みもろやま</sup>に意富美和<sup>おほみわ</sup>の大神<sup>おほみわ</sup>の前を拝き祭りたまひき。

また伊迦賀色許男命<sup>いかがしこをのみこと</sup>に仰せて、天<sup>あま</sup>の八十平瓮<sup>やそひらか</sup>を作り、天神地祇<sup>あまつかみくにつかみ</sup>の社を定め奉りたまひき。

また宇陀<sup>うだ</sup>の墨坂神<sup>すみさかの</sup>に赤色の盾矛<sup>たてほこ</sup>を祭り、また大坂神<sup>おおさかの</sup>に墨色の盾矛<sup>くろ</sup>を祭り、また坂の御尾<sup>みでぐら</sup>の神  
また河の瀬<sup>のこ</sup>の神に、悉に遺<sup>こ</sup>し忘るること無く幣帛<sup>みてぐら</sup>を奉りたまひき。

これによりて役<sup>えやみ</sup>の氣<sup>け</sup>悉<sup>や</sup>に息<sup>あめのした</sup>みて、国家安らかに平らぎき。

## 注

- 1) 「疫病」流行病。
- 2) 「神牀」夢に神意をえるために忌み清めた床。
- 3) 「大物主大神」三輪山に鎮座する神。後出の「意富美和の大神」も同じ。
- 4) 「神の氣」神のたたり。
- 5) 「河内」大阪府八尾市近辺。
- 6) 「御諸山」奈良県磯城郡三輪山。
- 7) 「八十平瓮」多くの平たい皿。
- 8) 「宇陀」奈良県宇陀市。
- 9) 「大坂」奈良県香芝市逢坂。

